

絵皮 えかわ

原作者 げんさくしや :: [清] 蒲松龄 (Songling Pu)

翻訳者 ほんやくしや :: 王涵知 (Hanzhi Wang)

多読 Level 3

1

1 この本 ほん は言語的 げんごてき に簡約 かんやく されました



Picture from *Illuminated Liaozhai*, Circa 1895

ある学者王さん、がくしや タイユアン太原で朝の道で歩いた時、一人女の子に出会
えました。彼女がすごつく綺麗なので、学者の王さんはとてもうれし
かった。「どうしてこんな早朝に歩いていますか？」王さんが聞きました。
「私の父親ちちおやが人の金を狙ねらって、私が見知らぬ人と結婚けっこんさせられまし
た。そんな生活が耐たえられないから、逃にげました。」女の子はそう答え
ました。学者の王さんは女の子に同情どうじょうしていたから、家に連れて帰かえ
りました。女の子は死ぬほど喜びました。帰ってから、女の子は言い

ました。「このことは秘密だから、他の人に言わないでください」。それから、二人は人知れずに一緒に住み始めました。

数日後、王さんは町を歩きました。その時、ある禪師も道の側にいま

した、王さんを見ると、びっくりしました。「あなた、最近、なにがあ

ったの？あなたの体には悪霊の気配があるよ」と、禪師が質問しまし

た。王さんは「何も」と言った。その後もっと数回聞いたけど、王さ

んの答えは変えられませんでした。「変だな！この世に自分が死んで

いっても分からない奴やつもいるね」と言いって、禪師ぜんしが離はなれました。

王わうさんは変へんな感かんじがしたけど、あの女めの子この綺き麗れいささに感かん心しんさせられて、考こうえ続つづけなかつた。そう思おもいながら、少すこし後ご、ももう家かの前まへだ。でも、

自分じぶんのへやの扉とびらが中ちゆうから閉とめられていまいました。どうしたんだららう？王わう

さんさんが扉とびらの隙すき間まで中ちゆうを覗のぞき込こんだ。すると、醜みにくくて青あおい鬼おにが見みられ

ました。彼かれの齒はが鋸のこぎりのようように鋭えい利りで、目めが炎ほのおのようように光ひかっていた。

ベッべドどの上うへに一いっつ人にん間げんの皮かわが置おかれて、鬼おにがその皮かわに筆ふでで何なにか描えいて

いた。終わると、鬼おにが皮かわを着て、女の子になりました。

王すじさんは凄おどろく驚おどろいて、扉とびらの前まえから逃にげました。「あの禅ぜんし師しは間まち違がえな

い、彼いをもう一度いちど探さがさなければいけない」。でも、街まちに戻かえった時とき、禅ぜんし師し

はもういなかっただ。探さがした後のち、町まちの外の外の野原の原に見みつけました。「どうに

かして私わたしを助たすけてください。」と、王すじさんが禅ぜんし師しに頼たのみました。禅ぜんし師しは

詳くわしく聞きいてから、王すじさんに「ちりはらい」という法ほう具ぐをあげました。

「これを扉とびらに掛かけて。鬼おにを止とめるはずだ。」

王さんは禪師ぜんしの言う通りにした。夜、女の子が来た。ちりはらいの前で止まって、部屋に入れなかった。禪師ぜんしを呪のろいながら、鬼おには扉とびらを打ち壊こわして、部屋とっしんに突進とっしんした。すると、鬼おにはベッドのぼに登のぼって、王さんの胸むねを引ひき裂きいてから、心こころを食くった。そうした後で、鬼おにが逃にげました。王さんの奥おくさんは全部ぜんぶを見て、泣ないてしまいました。もう一度王さんを確認かくにんして、もう死しんでいました。家族かぞの皆みなは怖こわくて、何も言いえませんでした。

翌日、奥さんは禪師を探しました。禪師が来た時、もう一人年寄りの

ばあちゃんも部屋の傍で歩いていました。そのばあちゃんを見た瞬

間、禪師が庭の中心に止まって、桃の木の剣を抜きました。「その

化け物、とまれ！私のちりはらいを返せ！」と言いながら、剣を振り

回して、ばあちゃんの皮を切り裂きました。その中には、切られた鬼

がいた。少し後で、鬼は死んでしまいました。

この無残な場面をみると、奥さんがもつと悲しくなりました。地面に
伏せて泣きながら、禅師は言いました。「私の力が弱いから、ご主人様
を助けることができません。でも、私のある知っている人が助けられ
るかもしれない。町には一人狂人がいる。彼に頼んだら、王さんを甦
らせる可能性がある。もしあなたが侮辱されたら、絶対怒らないでく
ださい。」奥さんは急いでその狂人を探すために出かけてしまいまし
た。

町の中で、奥さんがその狂人きやうじんを見つめました。彼は、汚きたなくて、悪いおいをしていた。奥さんを見ると、狂人は言いました。「変な人ね、私は死神しにがみか？」と嘲笑あざわらつて、杖つえで奥さんをぶちました。ぶたれたけど、奥さんは禅師の話を覚おぼえたので、何も言いわないで受うけました。

いっばんつうこうにん
一般通行人がだんだん集まっていた。そして、それを見ると、狂人が痰たんを道に出しました。「食べろ」、奥さんが言いわれました。もう一度、奥さんは禅師の話を覚しゃえていて、言いわれたことしたがを従したがいました。

もう黄昏たそがれだった。人達はもう家に帰りました。何も変化へんかが見られないで、奥さんは残念ざんねんに感じながら、戻りました。戻ると、王さんの死体したいを見て、そして、今狂人きやうじんにやられた侮辱ぶじよくを思い出して、奥さんは王さんの死体に伏ふせて泣きました。その瞬間しゆんかん、奥さんの喉のどに何かつつかえていたのを感じました。はくと、人の心だ。奥さんは早くその心を王さんの体に詰つめて、王さんの体温たいおんがだんだん戻もってきた。翌日よくじつ、王さんが甦よみがえりました。

嗚呼、世の中の人おろは愚かだね。化け物ものを綺麗だと思い、忠実ちゅうじつな人を

狂人きやうじんだと思ってしまふ。天道てんどうは当然とうぜんです（すべてのものごとはなるよ

うになる）が、わからない人が可哀かわいそう想そうだな。